

海市——もうひとつのユートピア

4月19日—7月13日

ICCギャラリーA

The Mirage City — Another Utopia

April 19—July 13

ICC Gallery A

連衆の反ユートピア精神

Severing the Links in Another Utopia

飯島洋一

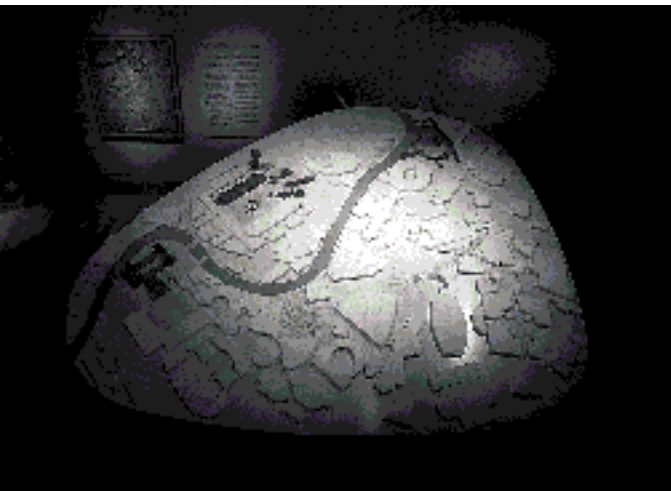
IIJIMA Yoichi

磯崎新がユートピアをテーマとして、中国のマカオ沖の人工島で計画中の「海市」を、新しい刺激的な角度から見せる展覧会が、先頃ICCのオープニング企画として開催された。今回の磯崎の展示は、これまでの建築展にとかくありがちな、パネルを羅列するだけのものとは異なるものなのだが、まずは磯崎の「海市」が、なぜユートピアという言葉を使うのか、それに対する私の率直な疑問から話を始めることにしたい。

「海市」は、正確には「もうひとつのユートピア」をうたったプロジェクトである。それゆえ従来の、たとえばトマス・モア的なユートピアとこれを一括りのものに考えることはできない。「もうひとつのユートピア」とは、新しい時代の、新しい意味でのユートピアなのだ。

では新しいユートピアとは何かと言えば、それは70年代後半あたりから始まった、高度情報化社会でのユートピア、ということになるだろう。ル・コルビュジェ的な、工業化社会の普遍主義的なユートピア像に代わる何か、ここでは模索されるわけであり、それは磯崎がこの「海市」を、トマス・モアのユートピアが「島」であったのに対し、「群島」が相互に結ばれてゆく連鎖状態の、その一つとして構想していることにも現われていよう。

しかし仮に新しいユートピアであるにせよ、これがユートピアをうたう以上、結局のところ、かつてのユートピアがそうであったような、ある「制度」はどこ



「海市」展 シグネチャーズ(第7週)

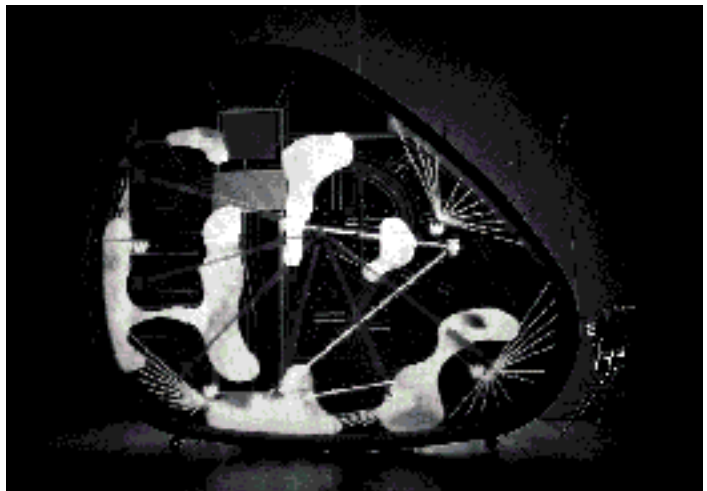
かに否応なく内在化しているわけである。さらに言えば、そもそも磯崎新という建築家は、ユートピアとはむしろ逆の、いわば反ユートピア精神を強くもった建築家であり、その磯崎がなぜユートピアを主張するのか、まず理解できないのである。たとえば彼がかつて描いて見せた《空中都市新宿計画》や《電氣的迷宮》といった作品では、廃墟の未来都市が示されていたが、それこそがこの建築家の原点であり、現在の思考のバックボーンでもあるはずである。

未来というものに、安直なかたちで何らかの夢や理想を抱く立場は、まぎれもなくユートピア的である。丹下健三は明らかにいまその立場にいるが、磯崎は未来都市を廃墟とすることで、正面からその問題に抵抗し続けてきたのである。その理由には、彼が現在でも太平洋戦争の敗戦に精神的根拠をもち続けているということがあり、同時に磯崎の態度は、いわゆる「制度」に対して異論を唱える立場を選択していることを指している。だからこそ、その磯崎が公然とユートピアを云々することが私にはわからないのである。

ともあれ、そうした疑問をもちながらも、ICCの展覧会の内容を眺めてみることにしよう。ここでは、マカオ沖に計画中の磯崎の「海市」を一個の「プロトタイプ」としたうえで、さらにそこから発展させたかたちで「シグネチャーズ」「インターネット」「ヴィジターズ」の三つのプログラムの提案がなされている。

三つの展示では、「海市」の島の輪郭をもつ500分の1の模型が置かれ、それをそれぞれのルールに基づき、参加者が自在に多様な変換をさせてゆく。したがって展示ということ言えば、今回の展覧会の特色は、磯崎自身の作品への評価よりも、いま述べた三つのあり方の変容そのものにあると言っている。これらの三つに共通するのは、「プロトタイプ」においても意図されていることだが、かつてのユートピアがそうであったような、普遍的な、あるいは唯一絶対者の眼差しが全体を俯瞰して細部までを練り上げるものではなく、さまざまな人々が介入することで、想像もしなかった都市がここに立ち現われることへの期待である。その刻々と変わる変化の刺激的な過程そのものを展示しようとするのが、今回の企画のそもそものアイデアであろう。

一つめの「シグネチャーズ」は、50人のあらかじめ選定された世界の建築家たちに、地割りをした敷地を与え、ピラネージの都市図を「海市」に重ね合わせて、そこにそれぞれの計画案が会期内につくられてゆくものである。しかし応答はじつにまちまちで、エンリク・ミラレスのように詩的なプランを提示する人もあれば、伊東豊雄やドミニク・ペローのように、どう見ても彼らの既存のデザインをそのままつぎたような人もいた。また山本理顕の場合のように、境界線に深く関心を寄せた独自のアプローチまで出されており、個々にはユニークな視点は見られたものの、全体として見れば勝手気ままなアイデアが



「海市」展 ヴィジターズ(第7週、
エリザベス・ディラー+
リカルド・スコフィディオ)

個別に披露されているだけで、企画者の意図が実現したとは言い難い。

また二つめの「インターネット」は、一般の人々がインターネットを使って今回の展示に参加できるユニークな企画なのだが、さまざまな興味深い変化は見られたものの、いくつもの思考が一つの場に連鎖するのみで、結果として新しい都市が現われる様相を発見するというわけにはいかなかった。

そうした中で三つめの「ヴィジターズ」は、私が最も関心をもった展示であった。これもあらかじめ選定されたデジタル系の12人の建築家や美術家たちが、それぞれ2週間の担当期間という幅で、「海市」の人工島の敷地全体を自在に解釈し、自在に変換させ、それを次の担当者に手渡してゆく。言ってみれば連歌形式の発案だが、岡崎乾二郎が敷地の形状に合わせてワイングラスを積み上げ、次の川俣正が早くもこれを嵐＝扇風機によって破壊するというハプニングが初めから起きた。

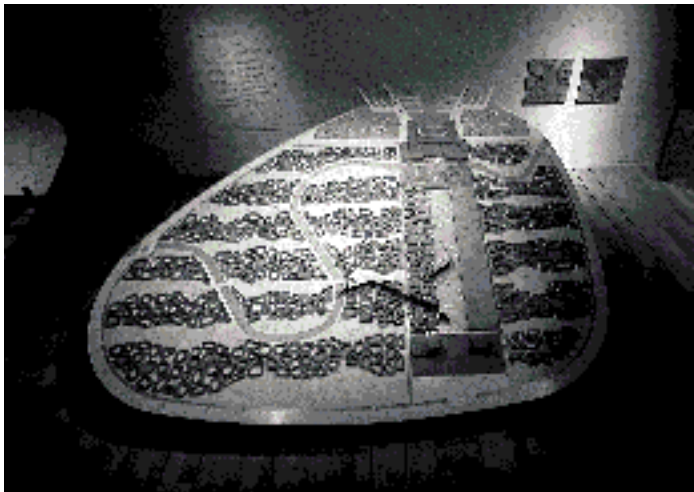
続く吉松秀樹は、この破壊された島を再生させるのではなく、そこから逃走する道を選ぶが、いずれにしてもユートピアや連歌どころか、プロジェクトは最初からとんでもない方向へと爆走したのだ。次の小林克弘がこの破壊された島を正統的な手法で再生させると間もなく、丸山洋志が島の形状やスケール、模型の傾斜などの初期設定そのものに異議を唱え、模型を床に置いてしまう。丸山の反逆は、さらにエリザベス・デラー+リカルド・スコフィディ

オにあつてはより過激なものとなり、アレハンドロ・ザエラ+ポロ+ファッシド・ムサヴィイにおいては島のモデルは放棄され、代わりに彼らの新しいアイデアが壁面に投影される。

私は原稿締め切りの都合上、6月21日の展示段階までしか見るができなかったが、私が見た範囲で言えば、「ヴィジターズ」のある参加者は、このプログラムそのものに強い抑圧を感じ取り、それを受け入れるのではなく、ある苛立ちをもって、アナキーなまでの破壊を試みたと感じた。そしてそこに見られるのは、まぎれもなく、かつて磯崎自身が行なった「制度」への異議申し立てが、今回の企画に対して唱えられている姿としていい。

私は先にも述べたような、私自身の磯崎新のユートピア計画に対する根本的な疑問や苛立ちが、ここに別様に示されていると思った。それは、この展示が結局はそのどこかに強固な「制度」を内在化させられていることであり、そうした意味で彼らの応答は、ユートピアという制度を転倒させようとする反ユートピア的な精神だったと言える。もちろん彼らの応答や批判が十分なものであったとは言わない。けれども「ヴィジターズ」の展示に、ある強い共感を抱かされたことは、はっきりと記しておきたい。 ＊

いいじま よういち: 1959年東京生まれ、建築評論家、多摩美術大学助教授。著書に『光のドラマトルギー』『王の身体都市』(以上、青土社)、『映画のなかの現代建築』(彰国社)などがある。



「海市」展 プロトタイプ(第7週)